

喜屋武マリー
の青春

利根川 裕

喜屋武マリーの青春

一九八六年十一月一〇日 第一刷

著者 利根川裕

発行者 岡本達也

発行所 株式会社南想社

東京都千代田区東神田 2・5・14

電話 03-八六六一二七九三

発売元 株式会社学苑社

東京都千代田区富士見 2・10・28

電話 03-二六三一三八一七

振替東京〇一一七七三七九

印刷 藤原印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

定価 一二〇〇円

© Yutaka Tonegawa
1986, Printed in Japan

ISBN 4-931178-07-3

287810



日文 701579190

喜劇

外国语学院图书馆
藏书

青春

A97365

南想社

喜屋武マリーの青春*目次

PEACEFUL LOVE

赤毛のマリー

22

少年の原風景

43

ロックへの旅立ち

63

十六歳の結婚

78

ベトナム戦争の影で

92

コザの夜空が燃える

116

挫折の季節

140

マリーのデビュー

160

失意の淵に立って

179

GOOD FEELING

197

まだ書いてない日記

211

喜屋武マリーの青春

PEACEFUL LOVE

一万人収容という会場が、もうあらかた埋まっていた。

しかも、入口のアーチをくぐってくる人の列がとだえない。会場は時間とともに膨れあがる。ここは、沖縄市宮競技場。

そこに野外ステージが特設されている。ステージを飾るアーチには、PEACEFUL LOVE ROCK FESTIVAL '86（ピースフルラブ・ロックフェスティバル'86）と大きな横文字。

かきわけて、舞台が真正面に見渡せる最後部スタンドの芝生に腰をおろす。

土も草も熱く燃えている。尻に汗が流れた。夏のさかりの午後の太陽と、ちょうど向いあう場

所だった。まともに光と熱が降りそそぐ。

沖縄は、太陽が近い。

二日前、羽田からの便で那覇空港に降りたたとたん、そう感じた。暑い、というより、太陽が近い、のである。それは、きのう、那覇の泊港から乗った快速船「ざまみ丸」の甲板でも感じていたし、ほぼ二時間後、目指す座間味島に着いてからも感じつつづけていたことであつた。

そしていま、七月二十七日、ロックフェスティバル⁸⁶の会場は、午後四時に近い。太陽が西がわにまわっている。西に傾いたそのぶん、太陽はもっと近くにあるようだ。

ロックは、近い太陽によく似合う。ダイナミックサウンドは、太陽に向けて吼える。トリオのバンドが、エネルギッシュにステージを駆けめぐっている。

「このトリオの名はゲート」

同行のAさんが、パンフレットを見て教えてくれる。そのパンフレットが、こう書いている。

——バンドリーダーは、ウィリー・ベラスケス（ベース、ヴォーカル）。……聴く者を飽きさせないステージング、インパクトの強い音楽は高い評価を受けている——

プレイヤーたちの大きなアクション。
「ノッテルかい」

と、ステージからの呼びかけに、

「イエーイ」

と、手をふりあげ足を踏みならすファン。二割か三割はアメリカ兵たち。そして、その友だちか恋人か家族の外国人女性たち。

「ゲート」の演奏が終りに近づき、ギターをかかえたトリオの一人が、ステージをつきつてライト・ウイングの壁にせり登って、聴衆に最後のメッセージを送る。また沸きあがるとよめき。半裸のアメリカ兵たちが、罐ビールをかけ合って躍る。

さて、つぎのバンドは、「マリー WITH メデューサ」。
パンフレットをめくってみる。

——マリーはイタリア、アメリカ、それに沖縄の血が流れているといわれ、そのロックの感受性は、詩人、作家など各分野の称賛を浴び、オキナワンロック独自の個性を持つ女性ヴォーカリストとして、「ロックの女王」の高い評価を得ている——

いよいよ、そのマリーの登場である。

いましがたの「ゲート」の演奏が呼びこんだ昂奮が、引き潮のようにゆっくりと鎮まってくる。次第にふえて来た人波とともに、新しい満ち潮がひたひたと寄せてくるように、スタジアムの雰囲気が変ってきた。

「マリー」

「マリー」

ここかしこからあがる叫び声は、これからはじまる「マリー WITH メデューサ」の演奏のオープニングを告げる花火でもあるようだ。

Aさんが、罐ビールを買ってきてくれた。ビールは思ったほど冷えてはいなかったが、渴いた喉をす早く通過してゆく。滴り流れる汗で水気も不足していたが、マリーの出を待ってカラカラに上気していたのもあった。

私は、マリーを聴き、マリーを見るために、ここに来たのである。

マリーの吹込んだ二枚のLPレコードを、私は持っている。そしてこの二枚が、私の所有しているロックミュージック・レコードの全財産である。

透明で、しなやかで、ふるえるように。かと思えば、ワイルドで、ハスキーで、パワフルで。私は、ロック・ファンではない。ファンでないどころか、ほとんど聴いたこともない。聴いた、といえるのは、マリーのLPだけである。そして、マリーのロックに、私はじゅうぶんに酔っている。

スタジオに、どよめきが噴きあがり、口笛が吹き鳴らされ、それをつき破って、「マリー WITH メデューサ」の演奏がはじまった。

やがて、マリーの登場。ぴったりと身体に吸いついている黒いレオタード。そしてラフに着込んだ黄色のジャケット。大柄でない姿態が軽やかに舞う。はるか最後部のスタンドからは、彼女の顔かたちや表情は見えないが、彼女の歌と彼女の動きが、彼女の伝えたいものを、たしかにスタンドの最後部にまで届けてくれる。

一曲が終わったところで、マリーはまず英語（アメリカ語というべきか）で会場に呼びかけた。耳慣れない私には何も聞きとれなかったが、ファンから喚声があがり、そしてアメリカ兵たちか沸きたった。つづいて、それが伝統的な沖縄言葉なのか、私にもわかるウチナーンチュ（沖縄人）という単語の入った呼びかけには、スタジアムの主勢力が拳を振りあげて歓呼の声をあげた。そのあとマリーはいわゆる標準語で呼びかけ、たぶん本土観光客であろう人たちや私を含めて、みんなは盛んな拍手でマリーに応えた。

アメリカ語と沖縄語と標準語の、三通りのメッセージ。私はこの事実に立ちどまる。

そして私は、PEACEFUL LOVEのアーチの文字を、つらいものを見るように見つめた。

那覇の泊港から、座間味島への船が出る。

ふだんは、一日一便。それが、七月二十日から八月三十一日までの期間、火・木・土・日曜日

には、一日二便となる。観光客がぐーんとふえるからだ。

沖縄市でのロックフェスティバルの前日の午前九時、私も連絡船「ざまみ丸」に乗込んだ。

この朝、目がさめると、ホテルの窓を雨がたたきつけていた。厚ぼったい雲があわただしく走っている。おなじ行くなら、晴れあがった夏の日の離島であってほしいのに。

座間味島は慶良間列島のひとつ。島のあたりの海は、透明度五十〜六十メートル、沖縄一澄んだ海といわれ、六十種に及ぶサンゴ群とその間を群泳する熱帯魚の姿がより美しく見える——かねて読んできた旅行案内書はそう書いていた。

折りたたみ傘をバッグにいれて港に着いたころ、雨はもうあがっていた。と、たったいまの雨雲を追いちらして、かあっと太陽が照りつける。

大きなザックを持った若ものグループ。そして子どもづれの中年夫婦。

島には、シャワー室、トイレ、共同炊事場を備えたキャンプ場がある。ハブがいないので安心してキャンプができる——これも旅行案内から得た知識である。

ところで、私はそれとは種類の違った知識をもまた持っている。

あの大戦末期の昭和二十年。日本の敗北は、もう必至だった。日本国内では、本土決戦が叫ばれ、アメリカ軍の日本上陸の日が迫っていた。

太平洋の島づたいに反攻してきたアメリカ軍が沖縄本島に上陸したのは、四月一日。ついに来

るべきものが来た。日本の衝撃は大きかった。

が、じつはそれに先立って、三月二十六日、アメリカ軍は慶良間列島に上陸したのである。

この日の朝八時ごろ、空からの熾んな爆撃と激しい艦砲射撃のあと、アメリカ軍はあっけなく慶良間列島の阿嘉島、慶留間島、そして座間味島に上陸した。

座間味島の港から一步入った通りのかたわらには、

「太平洋戦争沖繩戦上陸第一歩之地——昭和二十年三月二十六日午前九時」

と書かれた石碑が建っている。

上陸したアメリカ軍はただちに「米国海軍軍政府布告第一号」を發布した。

沖繩の血戦は、ここで、この日からはじまった。そしてここでは、アメリカ軍による軍政がはじまった。

私はいま、そういう座間味島へ行くのである。

私の知識はつづく——

座間味島の『村勢要覧』によれば、アメリカ軍の上陸にともなって、亡くなったものは千二百余人。このうち、村の三役はじめ集団自決者四百二人という。

座間味島だけではない。他の慶良間の諸島でも、集団自決があいついでいる。